

保育者のジェンダー意識と子どもへのかかわりに関する考察 —幼稚園教諭への質問紙調査の結果から—

A Study on Gender Consciousness of Kindergarten Teachers and Support to Children : Based on the Result of the Questionnaire to Kindergarten Teachers

梅 本 恵

UMEMOTO Megumi

ジェンダー平等保育を担える幼稚園教諭の養成・現職教育を考えるために、質問紙調査を通じて、幼稚園教諭のジェンダー意識の把握を試みた。家庭外の社会的活動に女性が参加することへの反対意見が賛成を上回り、同じ質問を行った世論調査と大きく違う結果となった。しかし、他の質問項目では顕著な違いは見られず、幼稚園教諭のジェンダー意識の傾向はとらえられなかった。さらに、幼稚園教諭の子どもへのかかわり方とジェンダー意識の関係について分析を行ったが、有意な関係はほとんど見いだせなかった。幼稚園教諭の中でも個々によってジェンダー意識は多様であり、また、個人の内部でも必ずしも整合性と一貫性があるわけではないことが示唆された。養成教育の段階でのジェンダー学習と共に、ジェンダーを自らの問題ととらえる生涯にわたる教育が問われている。

キーワード：ジェンダー意識、子どもへのかかわり方、幼稚園教諭

I はじめに

男女共同参画社会の実現が 21 世紀の重要課題となっている今日、その実現に向けて教育の果たす役割は一層高まっている。21 世紀の国際社会を展望し国連加盟国が共有する「ミレニアム開発目標」は、人間開発を重視し、その中で、ジェンダー平等推進と女性の地位向上を大きく位置づけている。それでは教育においてジェンダーはどのように問題とされてきたのだろうか。亀田（2000）は、以下のように整理している。教育の機会均等、男女共学という制度的平等を目指し、実現する初期の段階から学校の男女分化の内部構造や「隠れたカリキュラム」が問題となる段階を経て、現在は、教育を担う教師に関する問題が焦点となっている。ジェンダー平等の担い手を育成する教育の重要性が認識される中で、ジェンダー平等教育¹⁾を担える教師の養成と教師教育が重要な課題となっているのである（鶴田 2012）。佐藤ら（2003）は、教師が「ジェンダー・フリー教育」をいかに実践していくのが、今日の「ジェンダーと教育」の中心的な課題

で

あることを強調している。これらは主に小学校以降の学校教育を対象に論じられてきたが、「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」とされる幼児教育において、幼稚園教諭はどのようなジェンダー意識を有し、子どもにかかわっているのだろうか。保育所・幼稚園における保育は小学校就学以降の教育とは異なり決まった教科書があるわけではない。関口（2005）は、保育・幼児教育においては、保育者の日常的な子どもへのかかわり方や環境構成が鍵になるため、保育者自身のジェンダー意識がとりわけ重要であることを指摘している。

我が国において幼児教育・保育の分野で、ジェンダーが研究の課題としてとりあげられ始めるのは今世紀に入ってからである（藤田，2004・2007；武田，2005；大滝，2006；作野，2008）。ジェンダーに敏感な視点を持った保育者養成・現職教育については、その重要性が認識されてはいるものの、実際の取り組みの報告はまだ少ない（佐藤ら，2003・2004；池田ら，2005）。そのような中でも、神田ら（2007）の、「保育・子育て全国3万人調査」は保育者²⁾の育児に関するジェンダー意識について興味深い結果を報告している。保育者は、育児・子育てを母親の仕事とらえ、3歳児神話³⁾を肯定する者が保護者よりも多いというのである。一方、ジェンダー意識と実際の保育の関係については、佐藤ら（2002）が、伝統的な性役割観をもつ保育者ほど自らの保育においてもジェンダーを容認し再生産を促していることを明らかにしている。また、保育者は自己の性役割観に関係なく、クラス運営のストラテジーとしてジェンダーを用いていることも報告されている。さらに、金子ら（2008）は、保育者は、保育環境のジェンダー構成に対して、あくまでも園の慣習や方針に従っているという意識をもっており、必ずしも保育者個人のジェンダー意識が保育実践に反映されているわけではないことを示唆している。

これらの研究では、「育児の場面におけるジェンダー意識」、「性役割観」といった形で、限定された側面からのジェンダー意識がとりあげられており、ジェンダーのあらゆる側面⁴⁾に対する保育者の意識を把握しているとは言えないと考える。また、保育者が有するジェンダー意識と保育実践の関係については明確な知見が得られているわけではなく、さらなる研究の蓄積が問われているといえるだろう。以上のことから、ジェンダー平等保育を担える保育者の養成・現職教育を考えていく上で、保育者のジェンダーに対する意識はどのようなものなのか、その現状の把握は必要不可欠であると考えられる。

本稿は、ジェンダー平等保育を担える保育者養成教育・現職教育という枠組みの中で、第1に、質問紙調査による幼稚園教諭のジェンダーに対する意識の実態を把握し、第2に、幼稚園教諭のジェンダー意識と子どもへのかかわり方の関係と傾向を把握することを目的とする。今回の調査はまず幼稚園教諭を対象とした。幼稚園教諭から着手する理由は、保育所保育指針には「性別による固定的な意識を植え付けることがないよう配慮すること」と記述されており、その内容が保育士に意識化されていることも予想されるが、幼稚園教諭の方はどうであるのか疑問に思ったからである。

Ⅱ 方 法

1. 調査対象

阪神地区にある S 市内の幼稚園（公立・私立）に勤務する幼稚園教諭 544 名
（パート職員は除く）

2. 調査時期

私立幼稚園、2012 年 1 月下旬から 2 月下旬

公立幼稚園、2012 年 3 月上旬から 3 月下旬

3. 手続き

S 市内の全幼稚園（公立 21 園、私立 40 園）の園長に対して、園の教諭（パート職員は除く）全員への質問紙調査を依頼した。許可を得た 57 園に、質問紙を園長宛てに郵送した。園長から職員への配布後、記入者は各自で直接返信用封筒にて返送するよう依頼した。なお、調査対象の公立幼稚園については S 市立幼稚園園長会に、また、私立幼稚園については S 市私立幼稚園連合会に、事前に調査内容の説明と人権等への配慮について口頭での説明を行い、了解を得て調査を実施した。

4. 質問紙の作成

質問紙は、以下の 3 つのパートと内容で構成した。

PART I：子どもへのかかわり方（表 14, 15）

金子ら（2008）の「ジェンダーと子どもへのかかわり方に関する 5 項目」の一部を参考に、7 項目で構成した。回答方法は、「大いにそうである」「どちらかというところである」「どちらともいえない」「どちらかというところではない」「全くそうではない」の 5 つの選択肢から、自分の保育実践を振り返って最も近い対応を選択するよう依頼した。さらに、⑥で「大いにそうである」「どちらかというところである」と答えた者には、⑦男女で異なると思われるのはどんな点かについて回答を依頼した（選択、複数回答可）。

PART II：ジェンダーに対する保育者の意識（表 1～13）

質問項目は、1998 年 7 月読売新聞社が実施した全国世論調査「男性と女性」と同様である。「男らしさ・女らしさ」に対する意識を問う項目（4 項目）、性別役割分担と結婚に対する考え方を問う項目（6 項目）、女性の職場進出について（2 項目）、性転換に対する意識を問う項目（1 項目）で構成した。読売新聞全国世論調査（以後、読売調査）を採用した理由は、社会的・文化的性差であるジェンダーに関して、あらゆる側面からの質問がなされていること、保育者のジェンダー意識の傾向を把握する際に、比較対象にできると考えたからである。

PART III：保育場面でのジェンダーに関する問題への実際の対応

本稿の目的は、PART I と PART II の分析なので、PART III の内容については省略する。

Ⅲ 結 果

1. 回収率

配布数は 544 部、回収数は 262 部、回収率は 48% であった。

2. 回答者の属性

回答者 262 人中、私立幼稚園在職者は 228 人 (87%)、公立幼稚園在職者は 33 人 (13%)、不明 1 人であった。性別は、女性が 242 人 (93%)、男性が 13 人 (5%)、回答なしが 7 人 (3%) であった。年齢は、20 代が 137 人 (52%)、30 代が 52 人 (20%)、40 代が 30 人 (12%)、50 代が 33 人 (13%)、その他 (60 歳以上) 10 人 (4%) で、20 代が過半数を占めた。幼稚園教諭としての平均経験年数は、9.3 年 (標準偏差 8.51) で、5 年未満が 92 人 (35%)、5 年以上 10 年未満が 62 人 (24%)、10 年以上 20 年未満が 61 人 (23%)、20 年以上 30 年未満が 23 人 (9%)、30 年以上が 10 人 (4%)、無回答 14 人 (5%) であった。

3. ジェンダーに対する保育者の意識

1) 「男らしさ・女らしさ」に対する意識

「普段、男女の違いを意識することがあるかどうか」については、「大いにある」と「多少はある」を合わせて 88% で、「あまりない」は 12% であった (表 1)。さらに、普段「男・女らしく」ありたいと思っているかどうかについては、61% が思っていると答え、思っていないのは 27% であった (表 2)。「らしさ」に対する意識は、読売調査の結果とほぼ同じ傾向であった。「理想とする男性の条件」は、「思いやりがある」が 177 人 (71%) で最も多く、「頼りがいがある」(145 人、58%)、「責任感がある」(118 人、47%)、「経済力がある」(81 人、33%)、「自分の意見を持っている」(77 人、31%) と続いた (表 3)。「理想とする女性の条件」は、「気持ちが優しい」が 192 人 (77%) が最も多く、「性格が明るい」(167 人、67%)、「家事・育児ができる」(128 人、51%)、「知識・教養がある」(91 人、37%)、「自分の意見を持っている」(49 人、20%) と続いた (表 4)。女性から見た男性の理想は、読売調査とほぼ同じ傾向を示した (思いやり : 61%、責任感 : 60%、頼りがい : 38%)。女性から見た理想の女性の上位 3 つは読売調査と全く同じであり、14 年を経ても男性・女性に求める「男らしさ・女らしさ」の具体的内容は変化していないことが示された。

2) 性別役割分担と結婚に対する考え方

「女性は結婚しなくても幸せな人生を送ることができると思うかどうか」という問いには、「そう思う」が 103 人 (39%)、「そうは思わない」が 94 人 (36%) 「その他」が 65 人 (25%) で、意見が分散した (表 6)。「男性は仕事に専念し、女性は家庭のことに専念するのが望ましいと思うかどうか」については、80% がそうは思わないと答

え、そう思うと答えたのは 9%であった（表 7）。一方、「女性は現在よりもっと家庭以外の社会的活動をすべきかどうか」については、賛成が 25%、反対が 47%、その他が 28%であった（表 5）。読売調査の結果（賛成 64%、反対 32%）と比べると、本調査では反対が賛成を上回るとともに、その他という回答が 3 割近くあった。また、「男性は結婚し家庭を持って初めて一人前と思うかどうか」については、17%が「そう思う」と答え、「そうは思わない」が 74%であった（表 8）。結婚の形式について、「婚姻届を出さない結婚でもかまわないと思うかどうか」について尋ねたところ、「かまわない」が 49 人で 19%、「そうは思わない」が 185 人で 71%であった（表 9）。読売調査の結果（かまわない 36%、そうは思わない 62%）と比べると、本調査では婚姻届を出さない事実婚に対する否定的な見方が高い値を示した。「夫婦が希望すれば結婚前の姓を名乗ってもかまわないかどうか」については、170 人（65%）が「かまわない」と答え、「そうは思わない」は 59 人（23%）であった（表 10）。

表 1 あなたは、ふだん「男」・「女」の違いを意識することがありますか、ありませんか。

大いにある	多少はある	あまりない	全くない	その他	合計
78 (30.0)	150 (57.7)	32 (12.3)	0 (0)	0 (0)	260 (100)

* () の中は%

表 2 ふだん「男らしく」、あるいは「女らしく」ありたいと思っていますか、そうは思っていませんか。

思っている	思っていない	その他	合計
158 (60.8)	70 (26.9)	32 (12.3)	260 (100)

* () の中は%

表 3 あなたが理想とする男性の条件をあげるとしたら、何ですか。3つまで○をつけて下さい。

思いやりがある	177 (71.1)	①
知識や教養がある	46 (18.5)	
容姿や体格が良い	18 (7.2)	
経済力がある	81 (32.5)	④
忍耐力がある	41 (16.5)	
自分の意見を持っている	77 (30.9)	⑤
責任感がある	118 (47.4)	③
仕事がよくできる	19 (7.6)	
頼りがいがある	145 (58.2)	②
その他	6 (2.4)	
合計	728	

* () の中は%、○内の数字は順位

表 4 あなたが理想とする女性の条件をあげるとしたら、何ですか。3つまで○をつけて下さい。

知識や教養がある	91 (36.5)	④
控えめでおとなしい	0 (0)	
自分の意見をはっきり言う	49 (19.7)	⑤
経済的に自立している	12 (4.8)	
容姿が美しい	31 (12.4)	
家事や育児がしっかりできる	128 (51.4)	③
気持ちがやさしい	192 (77.1)	①
仕事がよくできる	8 (3.2)	
性格が明るい	167 (67.1)	②
その他	16 (6.4)	
合計	694	

* () の中は%、○内の数字は順位

表 5 「女性は現在よりもっと、家庭以外の社会的活動をすべきだ」と思いますか、そうは思いませんか。

そう思う	そうは思わない	その他	合計
65 (24.8)	124 (47.3)	73 (27.9)	262 (100)

* ()の中は%

表 6 「女性は結婚しなくても、十分に幸せな人生を送ることができる」と思いますか、そうは思いませんか。

そう思う	そうは思わない	その他	合計
103 (39.3)	94 (35.9)	65 (24.8)	262 (100)

* ()の中は%

表 7 「男性は仕事に専念し、女性は家庭のことに専念するのが望ましい」と思いますか、そうは思いませんか。

そう思う	そうは思わない	その他	合計
24 (9.3)	209 (80.7)	26 (10.0)	259 (100)

* ()の中は%

表 8 「男性は結婚し、家庭を持って、初めて一人前だ」と思いますか、そうは思いませんか。

そう思う	そうは思わない	その他	合計
44 (16.9)	194 (74.6)	22 (8.5)	260 (100)

* ()の中は%

表 9 「婚姻届を出さない結婚でもかまわない」と思いますか、そうは思いませんか。

そう思う	そうは思わない	その他	合計
49 (18.8)	185 (70.9)	27 (10.3)	261 (100)

* ()の中は%

表 10 「夫婦が希望すれば、それぞれ結婚前の姓を名乗ってもかまわない」と思いますか、そうは思いませんか。

そう思う	そうは思わない	その他	合計
170 (65.4)	59 (22.7)	31 (11.9)	260 (100)

* ()の中は%

3) 女性の職場進出

「これまで男性がやっていた仕事への女性の進出について」は、「好ましい」が 71 人 (27%)、「どちらかという好ましい」が 108 人 (42%)、「どちらかという好ましくない・好ましくない」を合わせて 28 人 (10%) であった (表 11)。「女性の上司の下で働く事について」は、「あまり抵抗を感じない」77 人 (29%)、「全く抵抗を感じない」168 人 (64%) で、「多少は抵抗を感じる」と答えた者は、14 人 (5%) であった (表 12)。

4) 性転換に対する意識

「自分の性別に違和感を持ち性転換手術を受けることについて」、174 人 (66%) が「かまわない」と答え、「好ましくない」と答えた者は 9 人 (3%) であった。一方、73 人 (28%) が「どちらとも言えない」という回答であった (表 13)。

表 11 最近、トラックの運転手や工事現場の作業員など、これまで男性がやっていた仕事に、女性の進出が目立っています。あなたは、この傾向を、好ましいと思いますか、好ましくないと思いますか。

好ましい	どちらかといえば好ましい	どちらかといえば好ましくない	好ましくない	その他	合計
71 (27.4)	108 (41.7)	27 (10.4)	1 (0.4)	52 (20.1)	259 (100)

* () の中は%

表 12 あなたは、女性の上司のもとで働くことに、抵抗を感じますか、感じませんか。

非常に抵抗を感じる	多少は抵抗を感じる	あまり抵抗を感じない	全く抵抗を感じない	その他	合計
0 (0)	14 (5.4)	77 (29.5)	168 (64.4)	2 (0.8)	261 (100)

* () の中は%

表 13 自分の性に違和感をもち、女性になりたい、あるいは、男性になりたいという人のための性転換手術について、あなたは、本人の希望ならかまわないと思いますか、それとも好ましくないと思いますか。

かまわない	好ましくない	どちらとも言えない	その他	合計
174 (66.7)	9 (3.4)	73 (28.0)	5 (1.9)	261 (100)

* () の中は%

4. 幼稚園教諭のジェンダーに対する意識と子どもへのかかわり方

1) 子どもへのかかわり方

7 項目の質問に対する回答は表 14、表 15 のとおりである。

男女児に対するかかわり方で最も顕著であったのは、「⑤性別よりもその子の個性を優先している」である。「大いにそうである」(68%)、「どちらかというところである」(29%) を合わせると 97% であった。次いで「③男女同じようにあつかうのはよいが、過剰な配慮は行わないようにしている」が、「大いにそうである」(26%)、「どちらかというところである」(61%) を合わせて 87%、「①男女同じようにあつかい、違いや差が生じないようにしている」が「大いに」、「どちらかというところ」を合わせて 85% であった。「②すでにできつつある男女の差異をなくすために意識的に働きかけている」という項目は、「大いにそうである」(7%)「どちらかというところである」(36%) を合わせると 43% であった。一方、「どちらともいえない」という回答が 45% あり、「どちらかというところではない」(10%)「全くそうではない」(3%) という回答もみられた。同様の質問を行い賛成か反対かを尋ねた神田ら(2008)の調査結果(「どちらともいえない」66%、「賛成」20%)と比べると、本調査では、差異をなくすために働きかけていると回答した者が多く、「どちらともいえない」が少なくなっている。「④幼児期は性別による違いを認識することが必要なので、適宜知らせるようにしている」という項目は、「大いに」「どちらかというところ」を合わせて 35%、「どちらともいえない」が 43%、「どちらかというところではない」「全くそうではない」を合わせると 22% で、回答が分散した。「⑥実際に男女の違いがある部分では異なる

対応を行っている」という項目については、「大いに」（18%）、「どちらかという」（54%）で、72%が男女児の「差異」を認めて異なる対応を行っていることが示された。さらに、男女児で異なると思われる点を具体的にあげてもらったところ、「身体的な違い」が122人（66%）、「遊びなど好みの違い」が108人（59%）、「特性・得意なことの違い」43人（14%）、「体力的な違い」34人（11%）であった。

表14 男女児へのかかわり方

	大いにそうである	どちらかというようにそうである	どちらともいえない	どちらかというようにそうではない	全くそうではない	合計
①男女同じようにあつかい、違いや差が生じないようにしている	85 (32.4)	138 (52.7)	33 (12.6)	6 (2.3)	0 (0)	262 (100)
②すでにできつつある男女の差異をなくすために、意識的に働きかけている	18 (6.9)	94 (36.2)	116 (44.6)	25 (9.6)	7 (2.7)	260 (100)
③男女同じようにあつかうのはよいが、過剰な配慮は行わないようにしている	67 (25.6)	160 (61.1)	32 (12.2)	1 (0.4)	1 (0.4)	261 (100)
④幼児期は性別による違いを認識することが必要なので、適宜知らせるようにしている	11 (4.2)	80 (30.7)	113 (43.3)	45 (17.2)	12 (4.6)	261 (100)
⑤性別よりもその子の個性を優先している	179 (68.3)	75 (28.6)	6 (2.3)	2 (0.8)	0 (0)	262 (100)
⑥実際に男女の違いがある部分では、異なる対応を行っている	47 (17.9)	141 (53.8)	54 (20.6)	14 (5.3)	6 (2.3)	262 (100)

*（ ）内の数字は%

表15 幼稚園教諭がとらえる男女児の違い

身体的な違い	体力的な違い	遊びなど好みの違い	特性・得意なことの違い	その他	合計
122 (38.6)	34 (10.8)	108 (34.2)	43 (13.6)	9 (2.8)	316 (100)

*（ ）内の数字は%

2) 幼稚園教諭のジェンダーに対する意識と子どもへのかかわり方の関係

ジェンダーに対する幼稚園教諭の意識と子どもへのかかわり方に関係があるのかどうかをみるために、クロス集計と χ^2 乗検定を行った。グループ間に有意な差が見られた項目は以下のとおりである。

- (1) 男性は仕事に専念し女性は家庭のことに専念することに肯定的なグループは、男女児を同じようにあつかい違いや差が生じないようにしている。一方、性別役割分担に否定的なグループの男女児へのあつかいについては、傾向が特定できなかった。
- (2) 婚姻届を出さない結婚に対して肯定的なグループは、男女同じようにあつかうのはよいが過剰な配慮は行わないようにしている。
- (3) 婚姻届を出さない結婚に対して肯定的なグループは、幼児期の性別認識を必要ととらえ幼児に知らせるということはしていない。
- (4) 婚姻届を出さない結婚に対して否定的なグループは、幼児期の性別認識を必要なこととして幼児に知らせている。

Ⅳ 考 察

1. 保育者のジェンダーに対する意識

1) 性別役割分担と女性の社会的活動

結果から明らかなように、女性が家庭以外の社会的活動に参加することに対する反対(45%)が、賛成(27%)を上回っている。これは読売調査の結果と比較すると、幼稚園教諭に顕著な傾向であると言える。しかし、なぜ社会的活動への参加に反対なのかの理由については本調査では不明であることから、今後検討が必要である。また、「その他」と答えた者が28%と高い値を示していることから、設問の社会的活動の内容がイメージされにくいこと、判断がしにくかったことが推察される。その一方で、本調査では、幼稚園教諭の80%が、女性は家庭、男性は仕事に代表される性別役割分担には否定的であることが明らかとなった。一見矛盾するように見えるこれらの結果は、何を示しているのだろうか。幼稚園教諭は、女性の社会進出、就労を肯定はするが、いったん家庭を持つと女性は家事・育児を優先し、社会的な活動に参加すべきではないと考えているのではないだろうか。さらに、理想とする女性の条件の3番目に、家事・育児ができることがあげられていることを合わせて考えると(表4)、幼稚園教諭は、家庭においては女性が家事・育児を中心になって担うべきという性別役割を有していることがうかがえる。世界に目を向けてみると、「子どもの世話を本質的には母親による家庭内ケアとする子育てモデル」はもはや支配的地位を失い、女性にとって、「より公平な形で仕事の責任と家庭責任の両立」の必要性が生じているとOECDは報告している。そして、そのためには、育児休暇への公的支援、職場での機会均等とともに、「家庭内での家事および育児の平等な分担」が必要であることが指摘されている。このような流れからすると、幼稚園教諭が有する家庭における性別役割観は、従来の伝統的なものであるといわざるを得ない。

2) 結婚の形態と女性の生き方

「婚姻届を出さない結婚(以後、事実婚と表記)」の是非については、特徴的な結果が得られた(表9)。読売調査では、14年前のデータであるにもかかわらず、20歳代では事実婚を容認する人が52%を占めていることを考えると、幼稚園教諭の否定感(71%が反対)は強いと言わざるを得ない。事実婚を否定する回答が多くなったのは、回答者が、事実婚を「同棲」「内縁関係」など世間一般から認知されていないものとして理解したからかもしれない。また、神田(2007)らが報告している、育児・子育ては母親の仕事とする幼稚園教諭の意識と関係があるかもしれない。子どものためには家庭外での社会的活動を行わず、母親は育児に専念すべきであるという考えを支える「正式な」結婚・家庭建設が指向されているのではないだろうか。

2. 幼稚園教諭のジェンダーに対する意識と子どもへのかかわり方

1) 子どもへのかかわり方

結果から明らかなように、男女児へのかかわり方として、97%の幼稚園教諭が性別よりもその子の個性を優先するとこたえている（表 14）。幼稚園教諭は性差よりも個人差を重視して、男女同じようにあつかおうとする姿勢を有していることがわかる。このことは、保育者は子どもの個性や自主性を最優先しているという従来の報告（金子ら，2008 神田ら，2008）と一致するものである。しかしながら、金子ら（2008）が指摘するように、「すでに子どもたちが男女で異なる期待のもとに育ちジェンダー化されている状況」では、個性の尊重はその子らしさを重視するあまりジェンダー・バイアスを容認してしまう可能性がある。結果から明らかなように、すでにできつつある男女の差異をなくすために意識的に働きかけている幼稚園教諭は、少ない（表 14）。男女の差異が何によるものなのか、ジェンダーの視点での見直しがない限り、差異がその子の個性ととらえられ固定化されてしまう危険性を含んでいるのではないだろうか。

2) 性別役割分担に対する意識と子どもへのかかわり方

幼稚園教諭のジェンダー意識と子どもへのかかわりの関係を把握するためのクロス集計と χ^2 二乗検定の結果から明らかなように、「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性別役割観を有する幼稚園教諭は、保育においては男女児に同じようにかかわり違いや差が生じないようにする傾向があることが示された。これは、佐藤ら（2002）の伝統的な性別役割観を有する保育者ほどジェンダーを容認し再生産しているという報告とは反対の結果である。本調査で得られた傾向は、一見矛盾したものであり解釈に苦慮したが、保育においてあるべき姿が回答として選ばれていることが関係しているのではないかと思われる。回答者の自己認識にゆだねられる質問紙調査の限界でもあり、今後、質的な調査の必要性が示唆された

3) 婚姻届を出さない結婚に対する意識と子どもへのかかわり方

本稿の目的の一つである幼稚園教諭のジェンダー意識と子どもへのかかわり方の関係を把握するためにクロス集計と χ^2 二乗検定を行ったが、ほとんどの項目で有意な関係が見いだせなかった。その中で、婚姻届を出さない結婚に対する考え方との間にはいくつかの関係が見いだされた。先述したように、事実婚を肯定するグループは全体からみると 19%と少ないが（表 9）、子どもへのかかわりにおいては、男女同じようにあつかうが、過剰な配慮はしない傾向が認められる。また、このグループは、幼児期の性別認識をあえて促していない。一方、事実婚に対して否定的なグループは、幼児期の性別認識を必要なこととしてとらえ、男女児に伝えている。婚姻届を出さない結婚については、社会学の分野では、性別役割にとらわれない自立した男女の関係としてとらえられているのに対し、今回の調査では法的・社会的に認知されていない結婚というネガティブなイメージでとらえられたことが推察された。婚姻届を出さない結婚を回答者がどうとらえているかによって結果の違いが予測されるので、一概に

解釈はできないと考える。

V おわりに

本稿の第1の目的であった幼稚園教諭のジェンダーに対する意識の把握は、家庭外での女性の社会的活動と婚姻届を出さない結婚の是非の2つで特徴的な結果が見られた。しかし、他の項目では読売調査との比較において、顕著な違いは見られなかった。幼稚園教諭全体としてみた場合のジェンダー意識の傾向は今回の調査ではとらえられなかった。神田ら（2008）が指摘するように、幼稚園教諭のジェンダー意識は個人によって大きな違いがあり、多様であることが示唆された。また、伝統的な性別役割を否定しながら、女性の経済的自立には重点が置かれていなかったり（表4）、家庭内の役割分担は従来通り家事育児はもっぱら女性が担うものであったり、幼稚園教諭のジェンダー意識は、必ずしも整合性と一貫性があるわけではないことが示唆された。

第2の目的であった幼稚園教諭のジェンダー意識と子どもへのかかわり方の関係については、いくつかの有意な違いがみられたが、どのような関係であるのか分析に苦慮するものであり、傾向を見出すことはできなかった。

しかしながら、傾向が見えない、とらえにくいということ自体が、保育者養成・現職教育を考える上での重要な要因となるのではないだろうか。傾向がとらえにくい、見にくいという背景には、保育者のジェンダー意識が一貫したものではなく整合性を欠いていることがあると思われる。その人のジェンダー意識が、それまでの経験や生育歴に大きく規定されていることを考えるならば、逆に養成教育の過程での経験や学習により変容する可能性があることを示している。また、生涯にわたる継続的な学習として現職教育に位置づけられる事で、「ジェンダーと向き合う意識の深化・主体的態度の形成」が促進されると考える。

我が国の幼児教育においては、まだ、ジェンダーを特殊な問題とする傾向があることは否めない。今回の調査でも、質問に対して保育者としてあるべき姿を回答したり、判断を留保する項目がいくつか見られ、質問紙による調査の限界が示された。ジェンダーに対する意識は、自分を客観視し、自己意識と向き合わない限り把握できないといえる。今回の結果を踏まえ、今後質的な調査により保育者のジェンダー意識と子どもへのかかわりについて検討していきたい。

【注】

1) 1990年頃から、新たな方向性として、「男」と「女」という二分法を前提として男女の平等を考えるのではなく、二分法そのものの自明視を問いなおし、セクシャリティやジェンダー・アイデンティティの多様性を尊重する視点が強まった（木村，2011）。そのような流れの中で、ジェンダー平等という言葉は、男女の二分法そのものを問いなおす視点を強調した表現として国際的にも使用されることが増えている。このことを踏ま

え、本稿では、ジェンダー平等という言葉を教育・保育と結び付けて用いている。

2)「保育者」とは、保育用語辞典（2003）によると、広義には保護者や幼稚園・保育所の全てのスタッフを包含する言葉であるが、狭義には、幼稚園や保育所で直接子どもの保育に携わる者をさしている。したがって、本稿では、「保育者」を、幼稚園教諭と保育所保育士とを総称する意味において用いることとする。

3) 3歳児神話とは、子どもが3歳になるまでは母親が子育てに専念しないと乳幼児の発達に悪影響が出るというある種の信念のことをいう（齋藤ら，2009）。

4) 加藤（2006）によると、ジェンダーという語には、大きく4つの用法がある。①性別そのもの、②自分の性別が何かという意識（ジェンダー・アイデンティティ、性自認）、③社会的につくられた男女差（ジェンダー差）、④社会的につくられた男女別の役割（ジェンダー役割、性役割）である。②の性別の自己認識は主観的な性別を示しており、必ずしも「男」「女」の2つだけではなく多様なものである。したがって、本稿で把握を試みるジェンダー意識（②、③、④）は、ジェンダー・アイデンティティ及びセクシャリティをも含めたものである。

【引用文献】

- 池田政子・高野牧子・阿部真美子・沢登英美子・池田充裕 2005 ジェンダーに向き合う保育専門職の養成 保育学研究 43(2), 245—255.
- 金子省子 青野篤子 2008 ジェンダーの視点で捉えた保育環境と保育者のジェンダー観 日本家政学会誌 59(6), 363—372.
- 加藤秀一 2006 『ジェンダー入門』朝日新聞社 23—35.
- 厚生労働省 2009 保育所保育指針
- 文部科学省 2009 幼稚園教育要領
- OECD（編著）星三和子他（訳）2011 OECD 保育白書 明石書店 25—52.

【参考文献】

- 藤田由美子 2004 幼児期における「ジェンダー形成」再考：相互作用場面における権力関係の分析より 教育社会学研究 74, 329—348.
- 藤田由美子 2007 幼児期における身体形成をめぐる保育者の解釈—ジェンダーに注目して— 教育学研究紀要 53(1), 470—475.
- 神田直子・戸田有一・神谷哲司・諏訪きぬ 2007 保育園ではぐくまれる共同的育児観：同じ園の保育者と父母の育児観の相関から 保育学研究 45(2), 146—156.
- 神田直子・河合麻紀 2008 保育者の男女児への個人マークの選択とジェンダー意識 心理科学 29(1), 32—44.

- 亀田温子 2000 ジェンダーが教育に問いかけたこと 亀田温子・舘かおる 編著 『学校をジェンダー・フリーに』 明石書店 24-36.
- 木村涼子 2011 国際的なジェンダー平等教育の流れと日本 解放教育 522
- 北九州市立男女共同参画センター“ムーブ” 2010 ジェンダー白書 7 KEKKON 結婚 男と女の諸事情
- 森上史朗他(編) 2003 保育用語辞典 ミネルヴァ書房
- 大滝世津子 2006 集団における幼児の性自認メカニズムに関する実証的研究 教育社会学研究 79, 105-125.
- 齋藤政子・伊藤葉子 2009 3歳児神話との関連で捉えた保育者の子育て観に関する国際比較-日本・中国・アメリカ・スウェーデンの保育者を対象に- 乳幼児教育学研究 18, 75-87.
- 作野友美 2008 2歳児はジェンダーをどのように学ぶのか-保育園における性別カテゴリーによる集団統制に着目して- 子ども社会研究 14, 29-44.
- 佐藤和順 田中亨胤 2002 園生活におけるジェンダー形成の多重構造 子ども社会研究 8, 53-64.
- 佐藤和順 田中亨胤 2003 幼稚園教師の意識変化に着目したジェンダー・フリー・プログラムの効果-教師スタンスの分析を手がかりとして- 保育学研究 41(2), 200-209.
- 佐藤和順 田中亨胤 2004 生活史的アプローチによる幼稚園教師のジェンダー観の揺らぎに関する研究 乳幼児教育学研究 13, 37-50.
- 関口はつ江 2005 課題研究報告 2004年公募「子育てとジェンダー」 保育学研究 43(2), 130.
- 武田京子 笹原裕子 松葉口玲子 2005 幼児のジェンダー・アイデンティティ形成過程とその要因 保育学研究 43(2), 256-268.
- 鶴田敦子 2012 「教師教育におけるジェンダー視点の必要性」報告書 日本教師教育学会 1-22.